

原点回帰

橋口博樹*

埼玉大学

埼玉大学の最寄り駅、京浜東北線の北浦和駅の近くに埼玉県立近代美術館がある。私は、この美術館が所蔵している「リタ・ヴァン・リアの肖像」を描いたモイーズ・キスリング (1891-1953) のファンである。2007年1月8日、新年早々の祝日に大学へ行きたくなかった私は、ふとこの美術館の企画展「エコール・ド・パリ」展に立ち寄った。キスリングはエコール・ド・パリの代表的な画家の一人である。登校拒否の言い訳に立ち寄り、リタ・ヴァン・リアの肖像画を「べっぴんさん」だなどと観ている程度であった。それ以来、いろいろな絵画を観に行くようになり、2007年夏に横浜でのキスリング展を観に行き、そこで改めてユダヤ系としてのキスリングの生い立ちを知った。

ふと何かの言い訳(?)に美術鑑賞していると、西洋絵画の巨匠と呼ばれる画家の多くは、模写を通して先人の絵画の特徴を深く追求し、さらにはオリジナリティをもって新たな時代を築いていったことに気付く。例えば、印象派の女流画家ベルト・モリゾ (1841-1896) は、画家になるための公的機関である官立美術学校への入学が女性には許されていなかった10代の当時、家庭教師を通じて写実主義の作風を学び、後に印象派を作っていった。17歳になってルーブル美術館ではじめて模写したようである。2007年秋に行ったモリゾ展のエントランスには、写真のように精巧な写実主義の影響を受けて描いたモリゾ姉妹の肖像画があったことを覚えている。印象派の画家として描いた数々の作品とは、素人目にも明らかに作風が違っていた。

さて、最近、研究するにしても論文を読んでまとめる前に、模写するのも良いかもしれないと思うようになった。特に原点となる論文は年代が経るにつれ、応用されたり、発展されたりしている。発展部分だけを見ていると、原点の発想を忘れがちになってしまうことに気付かされる。自戒の意味も込めて申せば、原点を深く追求したかという問いに、自信を持ってイエスと答えられない気がする。今一度、自分の研究の出発点に立ち返って、先人の論文を模写してみると、その息づかいが改めて分かってくるのではないのでしょうか。原点の論文を写しながら考えていると、何かその人の考え方がゆっくりしみ込んでくる気がします。

*hiro@mail.saitama-u.ac.jp